編集・発行：©倉敷芸術科学大学図書館（〒712-8505 岡山県倉敷市連島町西之浦2640 TEL. 086-440-1181 FAX. 086-440-1182）
編集・発行責任者：
館長 山岡萬謙
（国際教養学部教授）
編集者：
館員 井上弘行
館報は図書館ホームページでも読めます。
http://www.kusa.ac.jp/lib/MAIN.HTML

題号の由来

孔子と弟子たちの言行を収録した『論語』の「子曰、『学而不思則罔。思而不学則殆』」（「先生が言われた、『学んでも考えなければ、はっきり理解できない。考えても学ばなければ、確かなものとならない』」の意）による。

読みは日本語の音読みとした。

初代学長谷口澄夫先生の筆による。

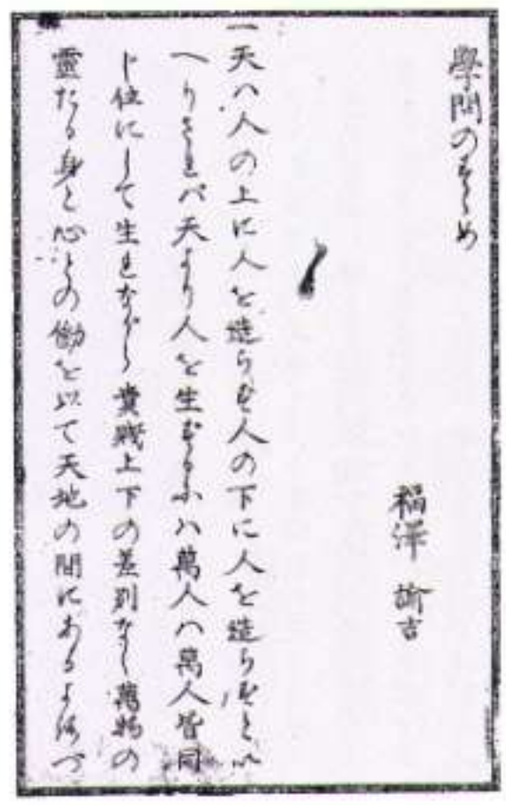
学問のすすめ

福沢　諭吉

福沢諭吉は天保五（一八三四）年に大阪に生まれた。長崎に留学の後、大阪の緒方洪庵の適塾に学び、その後江戸に蘭学塾を開いて子弟を教授した。この間、独力で英語を学び、万延元（一八六〇）年、幕府遣米使節に随行して渡米した。西欧諸国を視察して、『西洋事情』『世界国尽』を著す。

独立自尊、経済実学を標語として国民の啓蒙に尽力した。慶応義塾の創立者でもある。『学問のすゝめ』は明治五年から九年にかけて発表された十七篇から成るもので、明治の人心を刺激啓発して封建旧物打破の業をなさんとした貴重な大作である。本年は諭吉の没後百年にあたり、それを記念して明治六年に刊行された版本の複写を諸君に贈るものである。

希少価値のある啓蒙期の驚異的ベストセラー

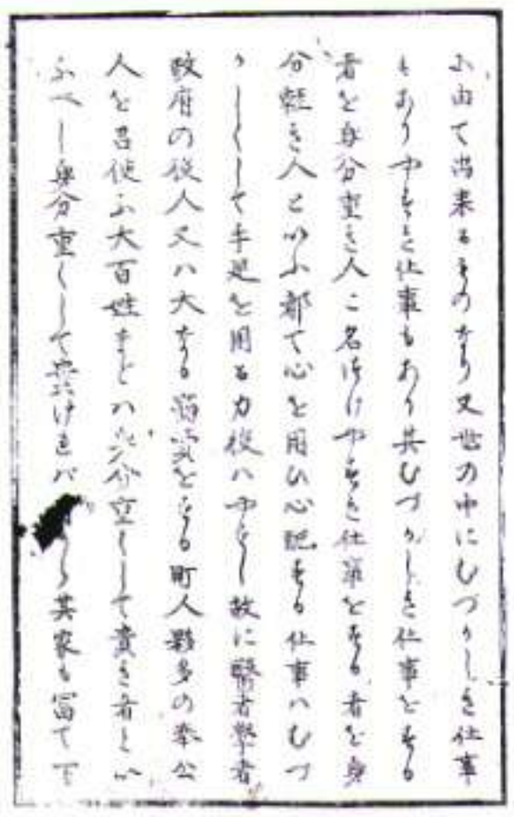


學問のすゝめ

稲澤　諭吉

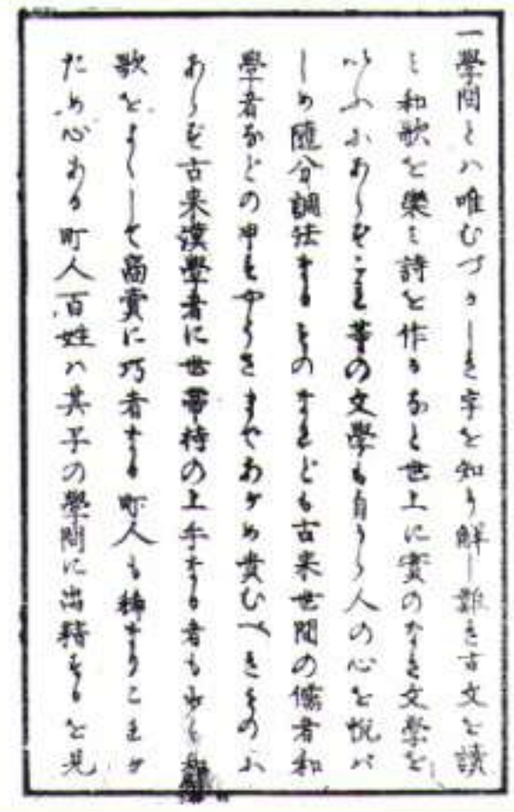
一天ハ人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり されバ天より人を生ずるハ萬人ハ萬人皆同じく仕にして生まれながら貴賤上下の差別なく萬物の霊たる身と心との働を以て天地の間にあるよろづ

の物を資り以て衣食住の用を達し自由自在互に人の妨をなすことなくして各安楽に此世を渡らしめ給ふの趣意なりされども今廣く此人間世界を見渡すに かしこき人あり おろかなる人あり 貧しきもあり 富めるもあり 貴人もあり 下人もありて其有様雲と泥との相違あるハ 何ぞや其次第甚だ明なり 實語教に人學ばざれバ智なし 智なき者ハ愚人なりとあり されバ賢人と愚人との別ハ學ぶと學ばざるとに

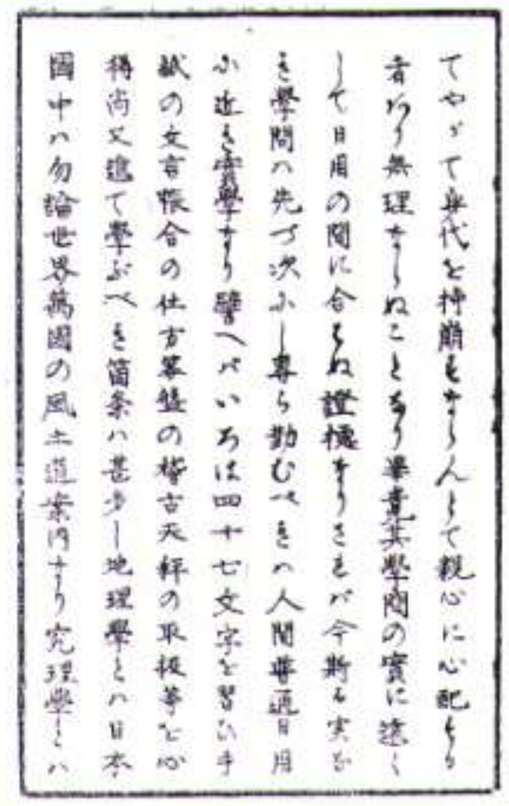


ふ由て出来るものなり又世の中にむつかしき仕事もあり やすき仕事もあり其むつかしき仕事をする者を身分重き人と名付け やすき仕事をする者を身分軽き人といふ都て心を用ひ心配する仕事ハむつかしくして手足を用る力役ハやすし故に學者學者政府の役人又ハ大なる商ひをする町人豪多の本公人を召使ふ大百姓まとハ身分重くして貴き者といふべし身分重くして学問なき者ハ

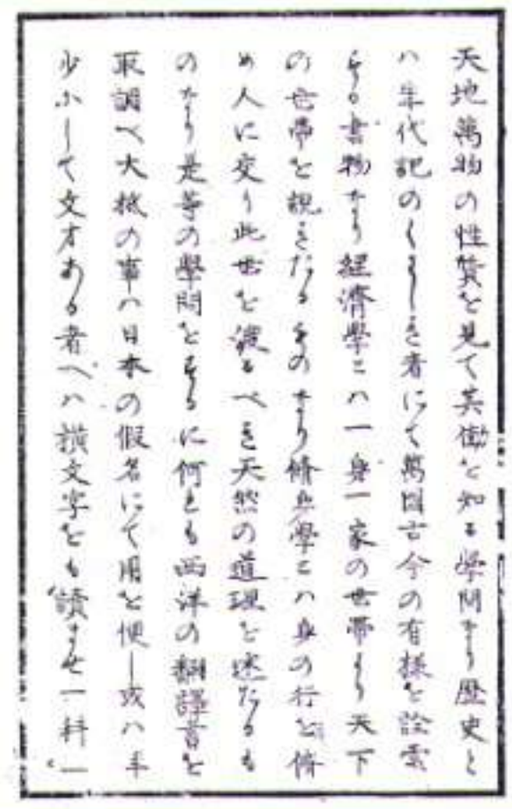
その者より見るハ及ぶべからざるが如くなれども其本を尋ねバ唯其人に學問の有と無とによる由て其相違も出来たるのみにて天より定たる約束にあらざるなり されバ學ばざる人ハ愚なり 學ばざれバ無智なり 智愚の別ハ學ぶと學ばざるとに



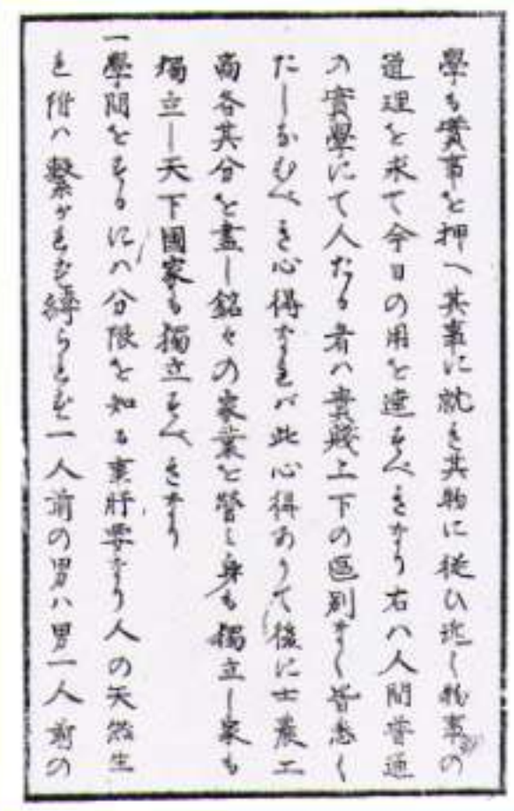
一學問とハ唯むつかしき字を知り難き古文を讀み和歌を樂み詩を作るなどと世上に實のなき文學をいふにあらず 凡そこの世の文學も自ら人の心を悦ばしむる方便なり されども古来世間の儒者和學者かどの中もやゝもすれば空虚なる議論に流れ実用に遠き事ども多し 古来漢學者に世帯持の上手なる者も少なし 和歌をよむ者も商賣に巧者なる町人も稀なるこなれば たゞ心ある町人百姓ハ其子の學問に出精するを見



てやがて身代を持崩すに人して親心に心配する者多し 無理なることなり 畢竟其學問の實に疎くして日用の間に合ざる證據なり されバ今斯る実に學問ハ先づ次ふ 專ら勤むべきハ人間普通日用ふ近き實學なり 譬へバいろは四十七文字を習ひ手紙の文言帳合の仕方算盤の稽古天秤の取扱等を心得尚又進て學ぶべき筋条ハ甚多し 地理學とハ日本國中ハ勿論世界萬國の風土道案内なり 究理學とハ



天地萬物の性質を見て其働を知る學問なり 歴史とハ年代記のことにして萬國古今の有様を詳かにする書物なり 經濟學とハ一身一家の世帯なり 天下の世帯を説きたるものなり 修身學とハ身の行を修め人に交り此世を渡るべき天然の道理を述たるものなり 是等の學問をするに何とも西洋の翻譯書を取調べ大抵の事ハ日本の假名にて用を便ずるハ手少なくして文才ある者ハ漢文字をも讀まざる一科一



學も實事を押へ其事に就き其物に從ひ形なき理を求て今日の用を達するなり 右ハ人間普通の實學にて人たる者ハ貴賤上下の區別なく皆悉くたしなむべき心得なり されバ此心得ありて後に士農工商各其分を盡し銘々の家業を營み身も獨立し家も獨立し天下國家も獨立すべきなり

一學問をするにハ分限を知る素行要なり 人の天然生を付ハ繋がるゝを縛らるゝと一人前の男ハ男一人前の

女ハ女にて自由自在なる者なりとも唯自由自在とのみ唱へて分限を知らざるハ我儘放逸に陥ること多し、即ち其分限とハ天の道理に基き人の情に従ひ他人の妨を為さずして我一身の自由を達することなり自由と我儘との界ハ他人の妨を為すと為さざることの間にあり譬へバ自分の金銀を費して為すことなればバ假令ひ酒色ふ耽り故業を盡すも自由自在なるべきふ似たりとも愛して然らざる一人の放逸ハ

諸人の手本となり逆ふ世間の風俗を亂して人の教ふ妨を為すがゆゑふ其費を野の金銀ハ其人のものなれども其罪許るべからず又自由独立の事ハ人の一身に在るのみならず一国の上にもあることなり我日本ハ亞細亞洲の東に離れたる一個の島国なれども古来外国と交を結ばず独り自国の産物のみを衣食して不足と思ひしこともなかりしが嘉永年中アメリカ人渡来せしより外国交易の事始り今日の有様

を及ひしことなれども色々と議論多く鎖国攘夷などゝやかましく叫ひし者もありしかども其見る所遠に狹く論に亡ふ井の底の蛙なれども其議論取るに足らざる日本なれども西洋諸国なれども同じく天地の間にありて同じく日輪に照らされ同じく月を眺め海を共にし空氣を共にし情合相同じき人民なれバなり余るものハ彼に渡し彼に餘るものハ我に取り互に相教へ互に相学び恥ることなく誇ることもなく互に使利を達し互に其幸を祈り天理人道に従て互の交を結ぶ理のたるふハアフリカの黒奴ふるに入り道のたるふハ英吉利亞米利加の繁盛をも恥を国の恥辱とありてハ日本国中の人民一人も残らず命を捧ゲて国の威光を落さざるを一国の自由独立と申すべきなり然るを支那人なるが如く我国外に国なるが如く外国の人を見ること犬ひとしくちに夷狄々々と唱へ足にてなるべく遠ざかるの中にこそ

を賤しめこれを嫌ふ自国のみをも計らずして妄に外国人を追拂ふんとし却て其虚説に陥ること多し、即ち其分限とハ天の道理に基き人の情に従ひ他人の妨を為さずして我一身の自由を達することなり自由と我儘との界ハ他人の妨を為すと為さざることの間にあり譬へバ自分の金銀を費して為すことなればバ假令ひ酒色ふ耽り故業を盡すも自由自在なるべきふ似たりとも愛して然らざる一人の放逸ハ

四民の位を一様ふするの基なるべき定りなりとハふべきなりこれバ今より後ハ日本国中の人民ふ皆ことなく其身に附たる位なるべし中ハ先づ其姿なるて唯其人の才徳と其居処とふ由て位もあるべきなり譬へば政府の官吏を粗略ふせざるハ當然の事なれども其人の身分貴きふあらずして其人の才徳を以て其役義を勤め国民のたるふ貴き国法を取扱ふ

人たる者ハ夫々の身分ふ応じ才徳を備へしかふ物事の理を知らざるべからず物事の理を知らんとするにハ学ばざるべからず是即ち学問の急務なる訳なり昨今の有様を見るに農工商の三民ハ其身分以内ふ有て士族と肩を並るの譬に洩れず今日なれども三民の内小人物あるを政府の上に採用せらるべき道理なきことなれバ

人誰ふ其政を好て良政を悪む者あらんや誰ふ本国の富強を祈らざる者あらんや誰ふ外国の侮を甘んずる者あらんや是即ち人たる者の常の情なり今の世に生を報国の心あらんや誰ふ身を苦しめ忍を焦すの心配あるふあらんや唯其大切なる目當ハこの人情に基きて先づ一身の行ひを正し厚く学に志

又寛仁大度の場合に及ぶべし法の苛きこと寛やかなるとハ唯人民の徳不徳に由て自ら加減あるのみ誰ふ苛政を好て良政を悪む者あらんや誰ふ本国の富強を祈らざる者あらんや誰ふ外国の侮を甘んずる者あらんや是即ち人たる者の常の情なり今の世に生を報国の心あらんや誰ふ身を苦しめ忍を焦すの心配あるふあらんや唯其大切なる目當ハこの人情に基きて先づ一身の行ひを正し厚く学に志

分を顧み我身分を重きものと思ひ身分の所行あるべからず凡そ世の中に無智文盲の民ほど憐むべく亦悪むべきものハあらじ智恵なきの極ハ恥を知らざるに至り己が無智を以て貪欲に陥り飢寒迫るときハ己が身を罪せずして妄に他の富る人を怨み甚しきハ徒党を結び強訴一揆なんどして乱暴に及ぶことあり恥を知らざるやかましく法を恐るゝを以て其身の安全を保ち其家の

し博く事を知り師々の身分に相應ふべきなるとの智徳を備へて政府ハ其政を施ふ易く諸民ハ其支配を受て苦みなき事ふ其所を得て共に全国の大平を護ら人たるの一事のみ今余輩の勧る学問も專らこの一事を以て趣旨とせり

学問のすゝめ終

女ハ女にて自由自在なる者なりとも唯自由自在とのみ唱へて分限を知らざるハ我儘放逸に陥ること多し、即ち其分限とハ天の道理に基き人の情に従ひ他人の妨を為さずして我一身の自由を達することなり自由と我儘との界ハ他人の妨を為すと為さざることの間にあり譬へバ自分の金銀を費して為すことなればバ假令ひ酒色ふ耽り故業を盡すも自由自在なるべきふ似たりとも愛して然らざる一人の放逸ハ

渡世をいとなむ者ハ其頼む所のみを頼て己が私欲の為にハ又こゝろを破る前後不都合の次第なるもや或ハたまく身代ふ慣れ相應の身代ある者も金銭を貯ることを知らずして子孫を教ることなきもの多し其子孫なるハ其愚なるも亦怪むふ足らず遂に遊惰放逸に流れ先祖の家督をも一朝の煙となすを者少からず斯る愚民を支配するにハ迂遠の道理を以て諭すべきなれども唯威を以て畏るのみ西洋

跋書

此書ハ福澤諭吉小幡篤次郎両著にて学問の趣意を記したる書にて私の作意ハ毫も交へず唯童男婦女子に勧学の為にとやさしく文字の懐を廣く書し供ふる大本なり

官許　明治六年巳五月

貴捌所

廣島縣　吉本實造　版

溝上佐之介

ベビーブームの波にもまれ、受験戦争に追われて文学書の類はほとんど読めなかった。その反動で大学入学後の山登りの合間に図書館、古本屋通いをして手当たり次第の乱読を試みた。当時は学生紛争の真っ盛り。学園封鎖もしばしばで、待機時間も多かった。おかげでシェークスピア文学の偉大さを知り、吉川、川端、漱石、五木、啄木、藤村文学、…そしてマンガに至るまで、様々なジャンルの名作に接し、そのすばらしさを実感し、読書の楽しさを知った。自分に合った作家、傾向を見つけることも出来たように思う。

しかし時すでに遅し、文学青年にはなり得なかった。

現在は、専門研究の関係から、植物・昆虫・動物などの図鑑、解説、そして自然、山、旅、環境、秘境紀行・実録が中心となっていて、フィクションの世界・文学の世界からは離れてしまった。おかげで、感動のうちに読み終えた名作『木を植えた人』にも、読後にフィクションであることを知って、その感動が褪せてしまうような精神構造になっている。鉄は熱いうちに…が大切である。

敗戦直後の子供時代、日本の国には自然以外には何も無かった。国破れて山河あり、必然的に山野を駆け回るばかりの少年時代であった。そのうえ父の友人がいた大原農業研究所（現岡大資生研）にも出入りし、昆虫採集の手ほどきを受けるに至って、頭の中は虫のことで一杯。文学少年とは程遠い生活だった。そんな息子の行く末を案じたのによってすべてを無くし、日本人としてのプライドも誇りも希望も無くしてしまいそうな暗い世の中。そんな中で、日本の将来を担う若者たちへのメッセージ、作家山本有三の熱き思いが伝わってくる珠玉の一冊だった。

国際教養学部
教授　河邊誠一郎

熱き思い
『心に太陽を持て』（新潮社）

自然への感動
『少年ケニヤ』（角川書店）

本の題名からも伺えるように、そこには、勇気と希望、信念と行動、誇り高い日本人、研究と教養、高尚な生き方、不屈の精神、紳士たること、郷土愛…を実践した人々が紹介されていて、深い感銘を受けた。

ちょうど同じころ、産業経済新聞に山川惣次による『少年ケニヤ』（角川文庫）が連載され、毎朝が楽しみとなった。『敗戦によって、商社員の父と離れ、未開アフリカの地で父を探して雄々しく生き抜いて行く少年とアフリカの友、動物・自然との大冒険小説』である。わくわくさせる物語りは、幼心に深く焼き付き、現在の私の自然感、秘境探検思考に大きな影響を与えている。いずれも何回も何回も読み返した。そこに込められた優しさ、不屈の精神、自然への感動の数々が、現在に至る物の考え方、行動、生活姿勢、人格形成に大きな影響を与えてきた。子供の頃、偶然に出会った二書ではあったが、40年以上を経た今、読み直しても変わらぬ感動を与えてくれている。

ある日母親がどこやらの古本市で数冊の文庫、自然関係の本を買い求めて来た。

自然大好きの息子にとっての初めての本格的な本であるから、もちろん昆虫、動物記（有名なファーブル、シートン著）もあったが、その中に一冊の日本少年国民文庫（新潮社）があった。それが『心に太陽を持て』である。敗戦か、

近隣図書館訪問記

総社市立図書館

レポーター　教養学部2年　島田　陽子
吉田亜紀代

師走の寒空の下、私たちは総社市立図書館を訪れた。地理的には、市民の足運びに便利な伯備線の総社駅から東へ、また吉備線の東総社駅から南へ、それぞれ約15分の場所にある。図書館の北側には市民会館、道路を挟んだ北西側には市役所があり、街路樹の紅葉も今季の終りを告げる陽光に映えるなかにあった。建物はベージュ色をした三階建てで約1800㎡の広さを有している。玄関右手には、「KUROHIME」の像が、反対側のプランターにはパンジーが来館者を待ち受けていた。そこに近づくと風除室上の大きなガラス窓が印象的である。

館内に入るとクリスマスツリーがあり、こちらは12月の季節感を醸している。それを眺めながら通過すると、談話コーナー、児童コーナー、さらにその奥に一般開架室がある。その他、音楽鑑賞用LDコーナー、幅広いジャンルのCDを揃えたコーナーもある。

二階には郷土資料に関する参考図書と学習室があった。

今をブームの「鬼ノ城」「吉備の文化」についての資料の豊富さを期待していたが、応対してくださった司書さんによると「歴史が余りに遡りその類の現物が少ない」とのことである。参考資料の周辺は、丁度、中高生の試験期であったのであろう、多くの生徒が利用をしていた。

昭和57年、本館が設立されるまでは、当市には図書館らしい施設はなかった。設立の当初利用者数は、年間で約九千人、現在ではその3倍近くになっている。これを年齢層でみるとお年寄りから子供までと幅広い。本のジャンルでは、専門的な学術書は避けてベストセラー本を中心に収集する。貸出期間は2週間で、冊数制限はなく家族でたくさん借りて行くそうである。

このような背景には公共図書館の性格に加え蔵書数約16万冊を誇る規模が、裏付けとなっているのであろう。市人口およそ5.6万人を支える文化の中心である。

利用者に応える次の言葉は、坂本司書さんによるものである。

「利用者あっての図書館ですから、出来るだけ要望にお応えするようにしています。最近の多様化するその種の願いには、予算との兼ね合いもあるなか一人でも多くの希望に沿うよう努力しています」

次に私たちは、誰にも開かれた図書館ということで、バリアフリーについてのお考えを尋ねた。

「設立の初期、まだそうしたことに対する意識は薄く、エレベーターなどは設置されていませんでした。今は車椅子で通れる幅を書架の間にとっています。本棚は、本を取りやすいよう低くもしています。トイレも車椅子専用が整っています。点字ブロックは初めからあり、視覚障害者の利便をはかり、また点字翻訳本を揃え、さらには朗読テープサービスもしています」

取材を通して「お話を語る会」の話題になったとき、当図書館のほのかな暖かみを感じた。

このように、総社市立図書館では、利用者の要望に応えてよりよい図書館にしていこうと、日々努力をしておられるのを実感して帰途についた。

総社市立図書館案内

〒719-1131　総社市中央3丁目10-113
TEL(0866) 93-4422

倉敷芸科大学生諸君！

牛になる

直木賞作家　出久根達郎（でくねたつろう）

二十一世紀を迎えた。これからの百年、世界は、日本は、どう変わっていくのだろう。私たちの生活は、どのようになるのか。私たちはどんな心構えで進めばよいのか。

だれも教えてくれない。こんな時は先人の智恵を拝借するに限る。昔の人は、まず、どのような気持ちで、新世紀を迎えたのか。書物のありがたいのは、これらのことを、逐一、教えてくれる。

明治の文豪、夏目漱石の日記を、ひもといてみる。漱石は二十世紀を、ロンドンで迎えた。イギリスに留学して二年目である。一九〇一年は、日本では明治三十四年に当たる。

漱石は下宿で、しばしば日本の前途を考えた。「日本はまじめにならなくてはならない、広い視野でものごとを見なくてはならない」と書いている。

また、こうも言う。「黙々として牛のように。鶏のように怠けずせっせと励め。まじめに考え、まじめに語り、まじめに行え」

まじめであれば、悪いようにはならぬ、というのが、漱石の結論のようである。漱石は日本のゆくすえについて考察しているのだが、日本人の生き方をも、そのように教示しているといってよいだろう。

黙々として牛の如く、は漱石の好きなフレーズであった。晩年、大学生の芥川龍之介にこんな手紙を書いている。

「勉強をしますか。何か書きますか。君方は新時代の作家になる積でせう。僕も其積であなた方の将来を見てゐます。どうぞ偉くなつて下さい。然し無暗にあせつては不可ません。たゞ牛のやうに図々しく進んで行くのが大事です」私たちは、とかく馬になりたがり、なかなか牛になりきれない、と漱石は解説する。

二十世紀の私たちは、馬だったのではあるまいか。何だか無暗につっ走ってきたような気がする。まじめだったか、と問われれば、さて、と考えざるを得ない。牛になることは案外むずかしい。

図書館　忙々日誌

7月▽12・13・14　目録システム地域講習会受講（桐山館員）▽13　平成12年度第1回岡山県大学図書館協議会研修委員会出席（谷本主任）

8月▽8　教職員夏期休業（16日まで）▽21～29　館内蔵書点検実施▽24　平成12年度整理技術（初級）講習会出席（谷本主任、橋本館員）▽28・29・30　平成12年度大学図書館司書主務者研修会出席（井上課長）

9月▽6・7・8　自衛隊体験入隊研修会（桐山館員）▽20　平成12年度第2回岡山県大学図書館協議会研修委員会出席（谷本主任）▽28・29　第30回私立大学図書館協会中国・四国地区研究会出席（井上課長）

10月▽4　第1回図書委員会開催、「図書館報『学而思』」「図書の選定」について▽10　第2回ネットワーク委員会▽11　館報第6号各大学図書館等へ送付。OPAC検索結果記入様式備付▽24　図書選書リスト教員に配布（11／20回収）。館内火災報知器自己点検▽25・26・27　第41回中国四国地区大学図書館研究集会出席（藤得参事）▽31　平成12年度第3回岡山県大学図書館協議会研修委員会出席（井上課長、谷本主任）

11月▽6　危機管理研修会出席（瀬良事務長）▽9　火災予防運動（15日まで）▽13　『學問のすゝめ』館報掲載準備取組▽21　出久根先生館報用原稿依頼▽22　卒業アルバム用図書館員写真撮影▽28　河邊誠一郎教授館報用写真撮影

12月▽13　総社市立図書館取材訪問（井上課長、教養学部2年島田陽子・吉田亜紀代）▽25　第3回ネットワーク委員会▽27　図書館閉館（1月5日まで）。館内大清掃▽28　書架整理。御用納め

「図書寄贈者（個人）」

左記の方々から図書の寄贈を受けました。館内掲示もさせていただきましたが、ここに改めて厚くお礼を申し上げます。

佐藤恒夫　重見之雄
井村圭壮　戸口ツトム
藤岡　進　斉藤俊郎
浅見　薫　信朝　寛
福田　茂　近藤恒子
中島千波　北山　毅

（右敬称・書名略、寄贈順、お名前のみにさせていただきました）

天牛愚見

…「老い」の語源は「大生（おおいき）」で、それが「老い（おい）」になったといわれる。こういう和語に対して、漢語の「老（ろう）」は「考」「耆」「者」「耄」など、ともに「夕」（おいかんむり）の漢字であって、「年寄ること」の意味が主であるが、それに加えて「すぐれている」「徳の高い人」「考え深い人」の意味があることも忘れてはならない。そこで、「老い」と「年寄り」の語について肯定的な意味で用いられている例を、いくつか挙げてみよう。

…「老いの入舞（いりまい）」は老後の安楽を意味することばであり、これに類することばとして、「老いの幸い」がよく用いられる。「老い手」は老練な腕まえ、「老い誇り」は年長者の自尊心をあらわす。「年寄り」は武家で政務に参与した重臣・江戸時代の庄屋、大相撲の関取が引退してもらった部屋の親方衆などをいう。「年寄役」は経験の多い老人の役目をさすことばである。

…「老い」「年寄り」の語が否定的な意味で用いられている例も多い。「老いのひがみ」「老いのひが耳」はともに老人にありがちな被害者意識をいう。「老い枯らし」は年老いて役に立たない人をさしていい、「老い狐」は悪賢い人のたとえである。「老いさらばう」は、老衰して醜くなることで、「老い込む」とほぼ同義である。「老いぼれ」は、年をとってぼけることであるが、多くの老人をののしっていったり、逆に老人自身が卑下していう場合もある。

…諺としての「老い」「年寄り」について述べてみる。「年寄りの冷や水」は、年寄りが身に似合わぬ危険を冒したり、元気のよいふるまいをしたりするのを、ひやかし、戒めた諺で、「老いの木登り」「年寄りの力自慢」「年寄りの夜道」などは同じ意味である。「老いては子に従え」は、年をとったら出しゃばらず、おとなしく子の意見に従うのがよいというのである。「老いたる馬は道を忘れず」という諺がある。これは経験を積んだ者は、行うべき道を心得ているという意味で、多くの古典に出てくる。

更に「老いて再び稚児になる」「六十の三つ子」という諺も多く用いられている。二つとも文字通り、老人はすべての能力が衰えて子供のように他愛がなくなるという意味である。

何はともあれ、「老少不定（ろうしょうふじょう）」といわれるのが人生である。この人間の生死は年齢に無関係であるという諺通り、自然の条理を示したこれらの名言を味わってみよう。